19世紀イランにおける政治家の初期キャリア
——ホセイン・コリー・ハーン・マーフィーの場合——

The Political Climate in Nineteenth Century Iran:
The Early Political Career
of *Hosein Qolī Khān-e Māfi*

河田 久美^{*}
KAWATA Kumi

ABSTRACT There have been some studies of the *Qājār* dynasty which have highlighted political figures by examining each one of them from various points of view. It is thought that in addition to the analysis of historical events of significance, such studies are also needed to understand the *Qājār* political history. In this paper, I will examine the early political career of *Hosein Qolī Khān-e Māfi*, who was Prime Minister at the beginning of the twentieth century, and depict his growth process as a political figure.

In his early political life, *Hosein Qolī* worked under *Ḥesām al-Saltāneh* one of the influential members of the Royal Family. He served *Ḥesām al-Saltāneh* mainly as a secretary at first, and later as a provincial governor's agent in Tehrān and as a chief official of *Esfahān*. He also managed *Ḥesām al-Saltāneh*'s private property, which involved dealing with a merchant and attempting to purchase estates for his master's fortune.

After about fifteen years' service, *Hosein Qolī* was forced to leave *Ḥesām al-Saltāneh* because of human relation troubles in the political arena: the rivalry between *Ḥesām al-Saltāneh* and the prime minister and the rivalry among the people serving *Ḥesām al-Saltāneh*.

It was normal for those people like *Hosein Qolī*, who were neither members of the Royal Family nor members of another influential family to serve and work under a politically powerful person. Through his experience under *Ḥesām al-Saltāneh*, *Hosein Qolī* learned administrative work, the economic life of those in power, and the way in which human relations in the political world worked.

---

* 大阪外国語大学非常勤講師
Lecturer, Osaka University of Foreign Studies

はじめに

カージャール朝時代に当たる19世紀のイランでは、経済・軍事・財政の状況を危機した政治家たちが改革を試みたが実を結ばず、政治的腐敗も進み、20世紀初頭の立憲革命へと事態は展開していった。この時代の政治史研究は、歴史的主要事件の分析が主流とはいえ、当時の政治に関わる者たちが置かれていた環境の諸側面を、特定の人物を通して解明しようとする試みもある⁽¹⁾。そして、このような研究もまた、政治史への理解を深める上で必要である。そこで本稿では、のちに政治的有力者になる人物の政治の世界での成長過程、換言すれば、この世界が有力者を再生産する過程を検討する。取り上げたのは、19世紀後半から20世紀初頭にかけて活躍し、1907年から翌年にかけて宰相を務め、同年に没したホセイン・コリー・ハーン・マーフィー Hōsein Qolī Khān-e Māfi Nezām al-Salṭaneh の政治的活動の初期、すなわち、ソルターン・モラード・ミールザー・ヘサーモッ・サルタネ Solṭān Morād Mirzā Ḥesām al-Salṭaneh という有力者のもとにいた時期で、ナーセロッ・ディーン・シャー Nāṣer al-Dīn Shāh の治世になる。主要史料は、ホセイン・コリー自身の回想録で、同書は、出生からヘサーモッ・サルタネのもとに赴くまでの簡単な記述に始まり、1321/1903年までを扱っている。

I. マーフィー家とホセイン・コリー

ホセイン・コリーの父祖（以下この家系をマーフィー家と呼ぶ、系図参照）と彼らが率いたマーフィー族の歴史については、ホセイン・コリーの曾孫 Ma'šūmeh Māfi が、自分の手許にある、ホセイン・コリーの従兄弟 Solṭān 'Alī の著書『*Tadhkirat al-Abā*』と、雑誌『*Yādgar*』に掲載されたホセイン・コリー自身が父祖とマーフィー族について記した文章をもとに、まとめている [Māfi 1362: 11-14]。以下、この記述を補足しながら、マーフィー族とマーフィー家について要約する。

マーフィー族は、当初、ロレスタン Lorestān にいたが、サファビー朝時代に離れてファールス Fārs に入り、ザンド Zand 朝には軍事的協力をした。しかしカージャール朝初代君主 Āqā Moḥammad の部族移住政策により、カズヴィーン Qazvīn, Kermānsh-āhān などに移った。マーフィー族の多くが後者に赴いたが [Yādgar: 33, 脚注 1], マーフィー家自体の本拠地はカズヴィーンになったようだ。カージャール朝時代に入っても、マーフィー家はマーフィー族のリーダーを代々輩出し、歴代シャーや第二代シャー、ファトフ・アリー・シャー Fath 'Alī Shāh の王子で皇太子のアッバース・ミールザー 'Abbās Mirzā のもとで軍事的活躍をしていたが、その一人、ケリージュ Qelij が子供を残さず⁽²⁾に没すると、兄弟たちは一族の財産を散財し、マーフィー族の主導権を失った。このケリージュの父方のおじシャリーフ Sharīf が、ホセイン・コリーの父親である。シャリー

Māfi 家系図

典拠 Māfi 1362:12- 15

フは、アッバース・ミールザーのもとで軍事的地位を得たが、次第に軍務から退いて文官になり、小さな地方の統治権 (ḥokūmat-e eyālat-e kūchek) を得た。趣味人 (šāḥeb-e zouq) で筆の人 (ahl-e qalam) だったという。

さて、シャリーフは二度結婚し、ホセイン・コリーは二人目の妻の子として1248/1832-3年に生まれ、22才までアラビア語や法学などの勉強に専念していた。1263/1846-7年に父が死去すると、相続できる手当の大半は腹違いの兄に行き、ホセイン・コリーは衛兵所 (keshikkhāneh)⁽⁵⁾ のゴラーム (gholām) の地位と給与を得た。文人タイプの彼は洪々務めていたが、やがて衛兵所長 (keshikchibāshi) との仲が悪化、衛兵所から出ようと決意するに至った。その頃、シャールの叔父ヘサーモッ・サルタネがホラサン Khorāsān 知事職を解任され、テヘランに came。そして、ホセイン・コリーは彼に仕えることになるのだが、そのいきさつを、彼は、自分が書いた請願書が受理されたためだと述べている [Māfi: 32]。しかし、ヘサーモッ・サルタネは、彼の父シャリーフらが仕えたアッバース・ミールザーの息子であり、上述のケリージュをはじめとして、マーフィー族はホラサン赴任中のヘサーモッ・サルタネのもとで軍事的活躍をしていた⁽⁷⁾。こうした事情が、ヘサーモッ・サルタネに仕えることになった背景にあると考えられる。ともあれ、1275/1858-9年、約15年に渡る二人の主従関係が始まった。

表1 ヘサーモッ・サルタネの動向

年	Ḥesām al-Saltāneh の動き	典拠
1233/1818	誕生	<i>MN</i> : 1540
1265(か1266)/1849	Khorāsān 知事に就任	<i>MB</i> : 999; <i>MSh</i> 2: 366; <i>RŠ</i> 10 385-6
1270/1853-4	Khorāsān 知事職から解任	<i>HA</i> : 137; <i>MB</i> : 1181; <i>MN</i> : 1757; <i>NT</i> 4: 89; <i>RŠ</i> 10:573
1272/1854-5	Khorāsān 知事に就任	<i>HA</i> : 169; <i>MB</i> : 1242; <i>MN</i> : 1783; <i>MSh</i> 2: 370-1; <i>NT</i> 4: 162-3; <i>RŠ</i> 10: 612
1275/1858-9	Khorāsān 知事職から解任	<i>HA</i> : 245; <i>Māfi</i> : 31; <i>MB</i> : 1318; <i>MN</i> : 1811; <i>MSh</i> 2: 372
	Fārs 知事に就任	<i>A'A</i> : 588; <i>FN</i> : 820; <i>HA</i> : 246; <i>Māfi</i> : 32; <i>MB</i> : 1324; <i>MN</i> : 1814
1277/1860	Fārs 知事職から解任	<i>A'A</i> : 588; <i>FN</i> : 820; <i>HA</i> : 264; <i>MB</i> : 1371; <i>MN</i> : 1832
	Khorāsān 知事に就任	<i>FN</i> : 823; <i>HA</i> : 264; <i>Māfi</i> :33 (1278年); <i>MB</i> : 1371; <i>MN</i> :1832; <i>MSh</i> 2: 372
1281/1864-5	Khorāsān 知事職から解任	<i>Māfi</i> : 38; <i>MB</i> : 1474; <i>MN</i> : 1867
1282/1865	Fārs 知事に就任	<i>A'A</i> : 588; <i>FN</i> : 827; <i>Māfi</i> : 41; <i>MB</i> : 1486; <i>MN</i> : 1873
1285(1286 ?)/1869	Fārs 知事職から解任	<i>A'A</i> : 588; <i>FN</i> : 834; <i>Māfi</i> : 44; <i>MN</i> : 1911
1287/1870	Yazd 知事職獲得(息子の赴任)	<i>Māfi</i> : 45; <i>MB</i> : 1614; <i>MN</i> : 1913
	'Atabāt 巡礼	<i>Māfi</i> : 45; <i>MB</i> : 1618; <i>MN</i> : 1915
1288/1871	Khorāsān 知事に就任	<i>Māfi</i> : 47; <i>MB</i> : 1651; <i>MN</i> : 1923; <i>MSh</i> : 377
	Yazd 知事職喪失と Eṣfahān 知事職獲得(息子の赴任)	<i>ER</i> : 278; <i>Māfi</i> : 48; <i>MB</i> : 1654, 1655; <i>MN</i> : 1924
1289/1872-3	Khorāsān 知事職から解任	<i>Māfi</i> : 58; <i>MB</i> : 1693; <i>MN</i> : 1935; <i>MSh</i> : 377
1290/1873	ヨーロッパ旅行	<i>Māfi</i> : 63; <i>MN</i> : 1930-1940
1291/1874-5	Eṣfahān 知事職喪失	<i>ER</i> : 281; <i>MN</i> : 1955
	Fārs 知事に就任	<i>A'A</i> : 588; <i>FN</i> : 845; <i>VE</i> : 6
1292/1875	Fārs 知事職より解任	<i>FN</i> : 847; <i>MB</i> : 1765; <i>MN</i> : 1958; <i>VE</i> : 33
1293/1876-7	Kordestān, Kermānshāhān 知事に就任	<i>MB</i> : 1787; <i>MN</i> : 1964
1297/1879-80	Kermānshāhān 知事職から解任 (Kordestān 知事職解任時期は不明)	<i>MN</i> : 2005, 2006
1300/1883	Khorāsān, Sistān 知事に就任 死去	<i>MN</i> : 2047 <i>MN</i> : 2047

II. ヘサーモッ・サルタネ

先ずヘサーモッ・サルタネの動きを要約しておく。(典拠は表1に記載)彼はアッパース・ミールザーを父として、1233/1818年に生まれた。ホラサン知事を1265/1849年頃から1270/1853-4年まで、及び1272/1855年から1275/1858-9年まで務め、二度目のホラサン統治を終えてテヘランに戻った際、ホセイン・コリーを迎え入れた [*Māfi*: 31-2]。その後、1275/1859年から1277/1860年までファールス、1277/1860年から1281/1864-5年までホラサン、1282/1865年から1285/1869年頃までファールスに知事として赴任した。1287/1870-1年にはヤズド Yazd の知事職を得たが、自身は行かず、息子アボル・ファトフ・ミールザー Abū al-Faṭḥ Mirzā を行かせ、自分は同年、シャーのアタバート ‘Atabāt への巡礼に同行した。1288/1871年には四度目のホラサン統治に向かう一方、ヤズドを失い、代わりにエスファハン Eṣfahān 知事職を得て、アボル・ファトフ・ミールザーを赴任させた⁽⁸⁾。1289/1872-3年にホラサン知事職から解任されたが、その前後から、ホセイン・コリーとの関係は悪化し、二人の主従関係は終わった。その後、ヘサーモッ・サルタネは、ファールスやホラサンなどの知事を歴任し、1300/1883年に死去した。

III. ホセイン・コリーの活動

(1) 書記としての活躍

それではホセイン・コリーの動向を見ていこう。*Māfi* には、1275/1858-9年にヘサーモッ・サルタネに仕えることを願い出た時、「必要なときには shoghl-e makhṣūṣī に任じられると決められた」とある。この“makhṣūṣī”は、以下の“makhṣūṣ (私的な)”とはニュアンスが異なり、「必要なときには」と呼応して、常時あるわけではない「特別な」という意味で使用されている。従って、この箇所を見る限り、ホセイン・コリーは、必要に応じて「特別な仕事 (shoghl-e makhṣūṣī)」を任されることになっただけで、常任の仕事を与えられたとは記されていない [*Māfi*: 32]。しかし *Yadgār* には「私的書記仕事 (shoghl-e taḥrīrāt-e makhṣūṣ) が指定され、割り当てられた」とある上 [*Yadgār*: 35]、願い出た時の請願書の文面や筆跡が賞賛されて登用されたという経緯から [*Māfi*: 32; *Yadgār*: 35]、当初より書記としての活躍が期待されていたと考えられる。実際、その事例は、ヘサーモッ・サルタネの1277/1860年のホラサン赴任から約10年間、いくつも見られる。従って、早い時期、遅くとも1277年には書記として活躍し始めた。そして後述するように、1288/1871-2年、兼務していた他の仕事への専念と、自らの後任の書記選びを命じられ、書記としての期間は終わった [*Māfi*: 49]。

ではどのような書記だったのだろうか。その性格を示す用語は、上述の taḥrīrāt-e makhṣūṣ のほか [*Māfi*: 238]、taḥrīrāt-e ḥoḍūri がある [*Māfi*: 34, 328]。makhṣūṣ (私

的な), ḥoḍūrī (御前の) という語から, 常にヘサーモッ・サルタネのそばに控えていたとわかる。ただし, 別の仕事で短期間, 彼から離れることもあった。

次に職務内容を検討する。1277年からのホラサン赴任で担った仕事を整理すると, テヘラン関係の書記仕事 (taḥrīrāt-e Tehrān) [Māfi: 35, 36], 命令 (aḥkām) の起草 [Māfi: 36], 請願への返答, 請願に関する命令の起草 [Māfi: 36, 37] であった。テヘラン関係の書記仕事の詳細は不明だが, 中央政府への書簡・報告などの執筆だろう。彼は文書の責任者 (mas'ūl-e koll-e neveshtejāt) で [Māfi: 37], 他には地元ホラサンの書記が一人しかおらず多忙を極め, 馬上や立ったままで書き [Māfi: 35], 二, 三時間の仮眠を取るだけだった [Māfi: 36]。特に, 反乱があったクーチャーン Qūchān では, その鎮圧後, 人心掌握のため, 恐らく混乱により通常より多かった請願への迅速な対応が要求され, 死ぬほど多忙だった [Māfi: 37]。

書記の仕事内容をうかがえる次の事例は, 1282/1865年のヘサーモッ・サルタネのファールス赴任に関するものである。当時, ファールスは騒乱状態で, ⁽⁹⁾ヘサーモッ・サルタネの赴任に先立ち, 先発隊を行かせることになった。その事情をホセイーン・コリーは, 出発前に先発者は新知事ヘサーモッ・サルタネからの「指示 (dastūr al-'amal) を受け取った。私 [Hosein Qolī] は命令 (aḥkām va arqām) をモシーロル・モルク Moshīr al-Molk のアドバイスで (be savābiddid) ……書いた。[先発者は] ……出発した。王子 [ヘサーモッ・サルタネ] は勅令と命令 (farmān va aḥkām) を必要とし, 私は [それを] リストにして (fehrest neveshteh), [宰相の] セパーフサーラール Sepāhsālār に持って行き, 渡した」 [Māfi: 41] と語っている。ここで, 先発者が受け取った「指示」は, 正式の知事より先に到着し統治行為をする権限を与えるための, 一般的内容の文書だろう。一方, ⁽¹⁰⁾モシーロル・モルクは, 当時テヘランに滞在していたファールスの地元有力者で, 現地の事情に通じていたから, その助けを借りてホセイーン・コリーが書いた命令の内容は, 混乱したファールスを治めるための当面の具体策だと考えられる。これを携えて先発者は出発した。そのあとホセイーン・コリーが作成した勅令や命令のリストは, 宰相に届けていることから, 正式な手続きを踏んで発行される権威の高い勅令や命令のリストである。ここでは知事交替に伴う数々の人事異動関連などの勅令や命令が考えられる。つまり, 彼は, ヘサーモッ・サルタネが配下の者に出す命令と中央政府への提出書類を書いたことがわかる。先発者に渡された「指示」も, 彼がしたためたかもしれない。さらに, ヘサーモッ・サルタネがアタバートへ向かった際, 彼は同行しない予定だったが, 急用であとを追ひ, 旅の一部を同行した。そこで, ヘサーモッ・サルタネの旧臣で, 当時, 彼の息子アボル・ファトフ・ミールザーのピーシュカール pīshkā (行政長官) としてヤズドにいたモハンマド・ホセイーン Moḥammad Ḥosein にナーゼモル・モルク Nāẓem al-

Molk というラカブを授与する勅令 (farmān) を起草したが、ここでは、先ずラカブ授与の内諾を得た上で、ホセイン・コリーが勅令を起草し、押印と署名をもらった [Māfi: 45]。知事交替に伴う命令起草の事例は、1288/1871年のヘサーモッ・サルタネのホラサン知事職獲得、それに続くヤズド喪失とエスファハン統治権獲得の際にも見られる。前任のエスファハン知事のワジール vazīr, バークルハーニー Moḥammad Ḥosein-e Bāqer-khānī など、それまでエスファハン政庁で活躍した人たちは、保身のため、ヘサーモッ・サルタネと接触した。しかし、彼はホラサン出發直前だったので「私は何もする暇はない。用事は Ḥosein Qoli Khān に言え、彼が必要な任命書 (aḥkām) を発行し、お前たちに送る」と言った。そこで、ホセイン・コリーは、彼らにヘサーモッ・サルタネの任地ホラサンの税務取り扱いなどの任命書を発行した⁽¹¹⁾ [Māfi: 49]。つまり、文書の執筆と発行だけではなく、知事交替で居場所を失った地方の役人の処遇といった、重要性の低い人事も任されたのである。

この頃まで、彼は主に書記として活躍したが、一時的には他の仕事もした。まず、ヘサーモッ・サルタネの任地内の地方や都市の統治を任されることがあった。例えば、1275/1858-9年からのファールス滞在時の、ダシュティー Dashti 及びダシュテスターン Dashtestān 地方の暫定統治である。これは、同年までテヘランから直接派遣されていた両地方の統治者を、ヘサーモッ・サルタネが、ファールス知事管轄下に戻ったこの統治者に再任しようとしたが、彼が固辞したため、ホセイン・コリーが急遽、赴任したものである。ここは、ファールス内でも治めにくい地方で、しかもホセイン・コリーの同行者は四、五人だけだったが、仕事は順調だったと彼は記している。仕事内容への言及は無いが、同行者が少数だから軍事活動とは考えられず、また統治者の最重要任務は徴税だから、何らかの税務だろう⁽¹²⁾。また1277/1860年からのホラサン滞在期に、Balūch 族の移動路調査とホラサン南部から Kermān, Sistān, Balūchestān にかけての地図作製に携わった [Māfi: 327; Yādgar: 35-36]。しかし、本人の弁によれば「御前の書記の仕事 (shoghli-e taḥrīrāt-e ḥoḍūri) の方が [ファールス内の地方の統治] より好きだし、その地位にいた方が、快適で尊重された (rāḥattar va moḥtaramtar)。」 [Māfi: 328]。

(2) テヘラン駐在ワキール、資産管理者としての活躍

さて、主に書記として経験を積んだ後、いかなる仕事に従事したのだろうか。新しい書記が選定される数ヶ月前、当初アタバート巡礼に同行しなかった理由としてホセイン・コリーは、ヤズドのワキール vakīl 職、ヘサーモッ・サルタネの個人的仕事 (jam'i-ye kārhā-ye shakhṣī), ナタンズ Natanz の統治 (ḥokūmat) を担っていたことを記している [Māfi: 45]。また新しい書記を決める直前、ヘサーモッ・サルタネはホセイン・コリー

のすべき仕事は、エスファハーンとナタンズの仕事 (kār), 個人的仕事 (omūr-e shakhshī), ナーイェボッ・サルタネ Nāyeb al-Saltāneh の結婚 [に関する仕事] だと述べた [Māfi: 49]。このうち、エスファハーンと Kāshān の間のナタンズについて、ホセイン・コリーは「私の管轄 (edāreh) にある」[Māfi: 45, 51] と記しているが、実際は、ヘサーモッ・サルタネの統治権の下請けである。ホセイン・コリーは、現地に赴任はせず、代理を置き、他の仕事と兼務しながら、折に触れ立ち寄って、この仕事をこなしていた。例えば、エスファハーンのピーシュカールをしていた1289/1872年春、テヘランの短期滞在を終えて戻る途中、ここに来て、代理統治者 (nāyeb al-ḥokūmeh) と長老 (rishsefid) たちを呼んで、会計処理をし (be ḥesāb gozashteh), 新年の彼らの仕事のやり方 (tartib-e kār) を調べた [Māfi: 56]。税業務の新年は春分の日から始まるから、これは具体的には、旧年度の税務会計の整理、新年度の税務方法の手配や確認だと考えられる。⁽¹⁴⁾ また、ナーイェボッ・サルタネの結婚に関する仕事とは、1286/1869-70年に婚約したシャーの王子カームラーン・ミールザー・ナーイェボッ・サルタネ Kāmran Mirzā Nāyeb al-Saltāneh とヘサーモッ・サルタネの娘との結婚準備を指す [Māfi: 45]。

ヤズドのワキール職とエスファハーンの仕事は同じである。すなわち、地方知事のテヘラン駐在ワキール、つまり代理人、エージェントで、中央政府と地方政庁とのパイプ役である。ヤズドのワキールとは、1287/1870年に赴任した、ヘサーモッ・サルタネの息子アボル・ファトフ・ミールザーのワキールである。在職中に果たした役割の具体例として、ピーシュカールのナーゼモル・モルクへの不満を、ヤズドの住民が、テヘランのホセイン・コリーに訴えに来たため、アタバート旅行中のヘサーモッ・サルタネに報告し、その指示に従い処理したという出来事がある [Māfi: 46]。続いてホラサン赴任が決まったヘサーモッ・サルタネのテヘラン駐在ワキールになったが [Māfi: 48]、間もなく弟モハンマド・ハサン Moḥammad Ḥasan が彼に替わった。そして自分は、ヤズドからエスファハーンに転任したアボル・ファトフ・ミールザーのテヘラン駐在ワキールになった。エスファハーンでもピーシュカールになったナーゼモル・モルクは赴任後、病死した [Māfi: 49]。ホセイン・コリーは、彼の死に乗じてエスファハーンの徴税が厳しくならないよう、また、故人の手当 (mavājeḥ) がその子供に支給されるよう手を打つため、シャーのもとへ赴た。もちろん、ホラサンのヘサーモッ・サルタネにも連絡した [Māfi: 49]。

しかしワキールの職務で特に重要なのは税務である。地方政庁から中央政府への納税に滞納があると、後者からの請求の矢面に立ち、金策に奔走した。アタバート巡礼出発の頃、ヘサーモッ・サルタネは息子を赴任させたヤズドの税の滞納分を請求された。⁽¹⁵⁾ それに対処したのが、ワキールであるホセイン・コリーで、一部をヤズドのピーシュカール、ナーゼモル・モルクに持参させ、一部を商人から借り、シャーが巡礼から戻った時、

滞納額の約三分の二を支払った [Māfi: 46]。アボル・ファトフ・ミールザーのエスファハン転任が決まった時、すなわちヤズドのワキールでなくなった時でも、滞納から解放されず、残り三分の一を気にかけている。また、当時はホラサンのワキールだったが、まだヘサーモッ・サルタネがホラサンに出発する前から、金策の心配していた。エスファハンについても、ヘサーモッ・サルタネの上納金支払いを条件にアボル・ファトフ・ミールザーの赴任が決まるや、この地の税務を懸念している。そのホセイーン・コリーに、ヘサーモッ・サルタネは、即刻、上納金を工面するよう指示した [Māfi: 48]⁽¹⁶⁾。

残る一つ、(ヘサーモッ・サルタネの)個人的な仕事とは、主人の資産管理・運営である。ホセイーン・コリーがアタバートへ行くヘサーモッ・サルタネを追ったのは、この旅行の準備などで生じた金銭上の問題のためである。ヘサーモッ・サルタネは旅行費用捻出のために、王子や有力者と取引のある商人ミールザー・タキー Mirzā Taqī と、宝石の取引 (mo‘āmeleh-ye javāher) をした。すなわちミールザー・タキーに宝石を売却、もしくは、それを担保に借金をした。しかしミールザー・タキーは、金額に見合った宝石を全ては受け取っていなかったため、旅行に同行した。そして、ヘサーモッ・サルタネに不要な宝石や、ホセイーン・コリーの名前で振り出された手形 (ḥavāleh) を受け取り、支払った、もしくは融資した金額と相殺した [Māfi: 46]。また同じ旅行の途中で、ホセイーン・コリーは、ヘサーモッ・サルタネの資産としての村の購入を試みた [Māfi: 45]。先述の結婚準備についても、彼は金銭上の困難を懸念しており、結婚準備の経済的側面は、この範疇にはいるだろう [Māfi: 48]。

最後にホセイーン・コリーと弟モハンマド・ハサンが手がけた土地取引も挙げておく。アタバートから戻ったヘサーモッ・サルタネは、ホラサン赴任の直前、モヘッブ・アリー・ハーン・マクラーイー Moḥebb ‘Alī Khān-e Mākū’ī という人物の相続人から、二つの村を購入しようとした。そして、ウラマーのもとで「ワジールのミールザー・イーサー Mirzā ‘Īsā⁽¹⁷⁾ が承認するどのような価格でも、その土地を買う」という文書を作成し、ホラサンへ出発した。その後、イーサーが価格35000トマンで承認する旨を文書に書き、これはホセイーン・コリーに渡された。ところが、この頃、イランの大部分で飢饉が起り、地主たちは穀物提供を迫られた。モヘッブ・アリー⁽¹⁸⁾の相続人も同様で、その上、前述の商人ミールザー・タキーに借金もあった。足元を見られた相続人の土地は、35000トマンから18000トマンに値を下げて売られた。当時、ホセイーン・コリーはテヘランを離れ、エスファハンのピーシュカールとして赴任していた。しかし弟モハンマド・ハサンが、知事としてホラサンへ行ったヘサーモッ・サルタネのテヘラン駐在ワキールだったので、この土地はモハンマド・ハサンに託された。ただし、ヘサーモッ・サルタネは、土地を完全に所有したわけではない。なぜなら、この取引は、以下のように込み入っていたか

らである。まず、書類上、土地はミールザー・タキーに売却された。ミールザー・タキーは代金を支払わなかったが、これは、モヘッブ・アリーの前相続人が、彼からの借金を相殺するためである。次に、ミールザー・タキーは、真の購入者ヘサーモッ・サルタネに土地を渡して代金を受け取る手続きをした。すなわち、ヘサーモッ・サルタネに連絡を取り、その指示に従って、売買文書 (qabāleh) をホセイン・コリーに譲渡 (enteqāl) した。これは裏書きなどで、文書のミールザー・タキーの名を、ホセイン・コリーに書き換えたことを意味するだろう。ただし、まだ代金を受け取っていなかったで、文書は自分で保管し、ヘサーモッ・サルタネ側、つまりホセイン・コリーやモハンマド・ハサンに渡さなかった。[*Māfi*: 63-4]。このように、ホセイン・コリーは、ヘサーモッ・サルタネの資産形成をはかったり、彼の個人的取引の実務をした。そして関連書類はホセイン・コリーの名前で作成される程、主人や取引相手に信用されていた。

1288/1871年、ホセイン・コリーは、エスファハンで急死したピーシュカル、ナーゼモル・モルクの後任になった [*MN*: 1925-6; *MB*: 1660; *Māfi*: 49-51]。折しも、イラン各地が大飢饉に見舞われており、彼もバフティヤーリー Bakhtiyārī 族と交渉するなど、小麦の確保に奔走した [*Māfi*: 52-53]。そして、1290/1873年まで在任し、その年、ヘサーモッ・サルタネとの主従関係に終止符を打った [*Māfi*: 65-66]。

IV. ホセイン・コリーとヘサーモッ・サルタネとの関係

(1) ヘサーモッ・サルタネの信頼獲得

前述のように、ホセイン・コリーは、資産管理を任される程、ヘサーモッ・サルタネに信頼されていた。信頼獲得の要因は、初めの約十年間の活躍の中で二点指摘できる。第一に、仕事の能力である。初めのファールス時代、急に派遣されたダシュティーとダシュテスターンであげた成果、クーチャーンの反乱というトラブルの中で膨大な書記仕事をこなしたホラサンでの仕事ぶりは、主人の目に留まらないはずはない。第二に、誠実な態度である。1281年、ヘサーモッ・サルタネがホラサン知事職から解任された時、ホセイン・コリーには、新ホラサン知事の統治下での書記職就任が提示された。しかし彼は断り、テヘランに戻ったヘサーモッ・サルタネのもとへ向かった。そして、一日中、次の仕事もなく、かつて自分に仕えていた者からも見放された不遇の主人のそばで過ごした [*Māfi*: 39, 40]。

このようにして獲得した信頼が、資産管理・運用につながっていくのである。信頼の証は、ヘサーモッ・サルタネからの、政治活動スタッフ人選依頼という形でも現れた。その一つは自分の後任の書記選びであり [*Māfi*: 49]、もう一つは、ヘサーモッ・サルタネが1288/1871年のホラサン赴任後、ホラサンのワジールを解任し、次のワジールの人選

を任せたことである [Māfi: 60]。

(2) ヘサーモッ・サルタネとの関係悪化

公私にわたり強い信頼関係が築かれたように見えたが、エスファハンをめぐり、この関係にひびが入り始める。1288/1871年、エスファハンでピーシュカール、ナーゼモル・モルクが他界した際、ホセイン・コリーは、シャーに彼の死去を報告に行ったその場で、後任としてのエスファハン赴任を命じられた。しかし彼は「王子（ヘサーモッ・サルタネ）はこの仕事（ピーシュカール職）ができる人たちを同行させており、私は[その人たちのの中から新しいピーシュカールを]派遣するようにと、[ヘサーモッ・サルタネに]使者を派遣した」と辞退した。またヘサーモッ・サルタネと親しい有力者に、「もしこのことがヘサーモッ・サルタネを通してされなければ、彼（ヘサーモッ・サルタネ）の失望の要因になり、[ヘサーモッ・サルタネは] Ḥosein Qolī Khān に対して立腹するでしょう」とシャーに奏上してもらった。しかし、シャーの考えは変わらず、ホセイン・コリーはピーシュカール職を受諾した。一方、ホラサンのヘサーモッ・サルタネは、配下にいた王族の長老セイフォッ・ドウレ Seyf al-Doule⁽¹⁹⁾を後任に決定し、派遣しようとしていた。そこへシャーから、ホセイン・コリーのピーシュカール就任を知らせる使者が到着した [Māfi: 49-50]。ホセイン・コリーの直接の主人である自分の意志が無視された屈辱は、ヘサーモッ・サルタネを傷つけただろう。それは1289年、ホラサン知事職からの解任時に増した。なぜなら、当時の宰相 (ṣadr a'ḏam) モシーロッ・ドウレ Moshir al-Douleh からホセイン・コリーに、この解任はホセイン・コリーが担うエスファハン統治とは無関係だから、引き続きエスファハンを治めるように、という内容の電信が届き、ホセイン・コリーに反感を抱く人たちの手によって、ヘサーモッ・サルタネに知らされたからである。ホセイン・コリーは、このことがヘサーモッ・サルタネと自分との関係を完全に断った、と記している。そして、ヘサーモッ・サルタネは、自分を呼び戻すよう要請する彼に、「そなたは国家が任命した者 (mā'mūr-e doulat) だ。私がそなたを召喚する権利を持てようか」と皮肉たっぷりの返答をした [Māfi: 58-59]。

これらの事件の背景には、宰相モシーロッ・ドウレによる、中央政府の地方政治に対する支配強化政策がある。この方針のもとに彼は、エスファハン統治スタッフの人選に干渉したのである。ヘサーモッ・サルタネの解任も、この政策によって引き起こされた、宰相と有力地方知事との対立の表れである。ヘサーモッ・サルタネは、解任に際して、監禁され、罰金まで取られた。⁽²⁰⁾そして、ホセイン・コリー自身も、この背景を認識していた。ヘサーモッ・サルタネの解任を聞いてテヘランに来ていた彼は、自分をエスファハンのピーシュカールからはずすよう、宰相を説得して言う、「今日、私がエスファハン

に戻ることに固執するのは、いくつかの理由で得策ではありません。……ホラサンでヘサーモッ・サルタネに対してこのような行いがなされたため、[ヘサーモッ・サルタネをはじめ故アッバース・ミールザー] Nāyeb al-Saltānehの子は皆、あなたに対して傷ついた蛇のようにになっています。このようなこと（自分をエスファハンのピーシュカールとして戻すこと）をすれば、ますます機嫌を損ねるでしょう。』[Māfi: 62] こうして、彼はエスファハンのピーシュカールから降りた。

中央政府と主人との間に挟まれ、後者との関係が悪化する中、ホセイン・コリーは、彼の僕としての立場を堅持しようとした。ヘサーモッ・サルタネを通じたピーシュカール就任を求めたのも、そのためである。また、先のヘサーモッ・サルタネの皮肉に対して「現在まで、自分自身があなたの任命した者であると思っていましたし、思っています」と答え、このやりとりで主人の自分への感情を知ると、すぐ、ホラサンからテヘランに戻った彼のもとへ参上した。テヘラン到着後、ホセイン・コリーは、宰相を訪問することを決っていたが、これは、ヘサーモッ・サルタネと宰相との対立を知っていた彼が、自分と宰相とが通じているのではという疑惑を抱かれないためだろう [Māfi: 59-60]。また、エスファハンのピーシュカール在任中には、ラカブ授与を辞退したが、その理由の一つは、提示されたラカブに“al-Saltāneh”という語が含まれ“Ḥesām al-Saltāneh”と似ているためで、もう一つは、アボル・ファトフ・ミールザーより先にラカブを得れば、父ヘサーモッ・サルタネの気分を害するから、ということだった [Māfi: 55]。

(3) ヘサーモッ・サルタネとの訣別

しかし、結局、彼はヘサーモッ・サルタネのもとを去る決意をした。その原因は、エスファハンの税、及び弟モハンマド・ハサンが関与した前述の土地取引をめぐるトラブルである。エスファハンのピーシュカールを辞したホセイン・コリーは、バーケルハーニーに、その座を譲った。ヘサーモッ・サルタネがエスファハンの統治権を獲得した際の人事異動で、ホセイン・コリーが発行した任命書により、ホラサンの税務に任じられた、エスファハンの前ワジールである。ホラサンでこの地位をねらっていたバーケルハーニーの希望はかなえられたが、エスファハンの前年の税のうち未徴収の40000トマンが中央政府から請求されていた。彼はこの40000トマンの納入も引き受け、工面して半分はすぐ納入し、半分は後に払うと約束した。ところが、バーケルハーニーは、ホセイン・コリーの就任によりエスファハンのピーシュカール職をのがしたセイフォッ・ドウレに取り入り、残り半분을ホセイン・コリーに支払わせると決めてしまった。この決定は、ヘサーモッ・サルタネも知っていた。というのは、ホセイン・コリーの弟モハンマド・ハサンはヘサーモッ・サルタネと会談し、自分たちが残りの20000トマンを支払うと伝え

ているからである。それでもヘサーモッ・サルタネは信用できなかった。当時、彼はヨーロッパへ行く直前で、ホセイン・コリーらはエンゼリ Enzeli まで見送りに来ていたが、彼が支払いを怠らないよう、エンゼリからテヘランへ戻る道中も監視するよう、セイフォッ・ドウレに指示した [Māfi: 61-63]。

次に土地取引の方をしてみる。前に述べたように、商人ミールザー・タキーに払う土地の代金は未払いで、ヘサーモッ・サルタネは「今は金がない、ヨーロッパから戻ったら、土地の代金の代わりに、宝石とショールを渡す」と言っていた。ところで、先にホセイン・コリーの人選でホラサンのワジールになった人物は、セイフォッ・ドウレの力を借りて、この土地の取得をねらっていた。前述のように、飢饉と地主の借金のため、土地価格は当初より下がったが、セイフォッ・ドウレは、ヘサーモッ・サルタネに、下がった価格ほどの価値もないと進言した。主人に土地購入の意志を変更させるためであろう。ヘサーモッ・サルタネが欧州へ旅立つと、セイフォッ・ドウレ側は、ホセイン・コリーの弟モハンマド・ハサンに、自分たちにミールザー・タキーとの交渉をさせるよう迫った。交渉の主導権を握り、土地取得工作をすることを目論んでいたのである。しかし、モハンマド・ハサンは認めず、主人の土地を守った。ところが帰国したヘサーモッ・サルタネは、経済的困難を理由に、ホセイン・コリー自身が土地を購入するよう命じた。彼が購入をやめた背景には、経済的問題だけでなく、セイフォッ・ドウレの「進言」のような画策があったかも知れない。ホセイン・コリーは、ヘサーモッ・サルタネの要求に対し、エスファハンの税の滞納分を支払い、土地購入の余裕は無いと断ったが、セイフォッ・ドウレを中心に、土地代金を無理にでも取るため、ホセイン・コリー捕縛が計画された。これを知ったホセイン・コリーは、弟とアブドゥル・アジーム ‘Abd al-‘Azīm 廟へ逃げた。ヘサーモッ・サルタネは、なだめようと使者を遣ったが、彼らが戻ることはなかった [Māfi: 63-66]。

おわりに

ヘサーモッ・サルタネと袂を分かったホセイン・コリーは、その後、ナーセロッ・ディーン・シャー治世末期の最有力者アミーノッ・ソルトーン Amīn al-Solṭān 父子の傘下に入り、重要職を歴任し、実力をつけていった。有力者の配下での実績の蓄積は、王族でもなく、有力でもない家系の出身者の政治的有力者が生まれる典型的なパターンである。⁽²¹⁾ その具体的事例である、ヘサーモッ・サルタネのもとでの活動で、ホセイン・コリーが学んだことは、二つに大別できよう。

一つは実務である。彼が経験した主な仕事は、書記、小地方都市の統治、地方知事のテヘラン駐在ワキール、地方知事のピーシュカール、主人の資産管理・運営である。最

後の一つを除き、公文書の作成、その取り扱い、税務に関わるもので、彼が文官としての実務経験を積んでいたことがわかる。資産管理・運営は公的性格の仕事ではない。しかし、有力政治家ともなれば、かなりの資産を持ち、広範な政治活動に伴い、収入も支出も多くなる。そうした有力者の立場や行動を理解する上でも、また、次第に政治的重要性を増した自分自身が、個人的経済活動をしていく上でも、主人の資産を扱った経験は、大いに役立っただろう。

ホセイン・コリーが学んだことの第二は、政治に関わる者たちの人間関係である。彼はヘサーモッ・サルタネとの信頼関係の崩壊過程で、二種の人間関係、すなわち宰相とヘサーモッ・サルタネとの対立、および同じ主人に仕える、いわば「同僚」の敵意の厳しさを知った。その上、ヘサーモッ・サルタネとの主従関係は、税務や土地取引の尻拭いをさせられるような性格のものだった。苦渋に満ちた経験は、自分が身を立てるために、何に配慮し、どう立ち回ればいいかを教えただろう。それはまた、政治の世界で活躍した人々全般の行動を規定した要因の一つを示している。

注

- (1) 19世紀末の宰相 Amin al-Douleh をめぐる政界の人間関係を論じた Farmayan, 同世紀後半の官撰書執筆・編集者、通訳官、E'temād al-Saltaneh の婚姻と彼の政治的活動との関係を述べた Kia の研究がある。Hafez Farmayan, "Portrait of a Nineteenth-Century Iranian Statesman: The Life and Times of Grand Visier Amin ud-Dawlah, 1844-1904," *International Journal of Middle East Studies* 15 (1983), 337-351; Mehrdad Kia, "Inside the Court of Naser od-Din Shah Qajar, 1881-96: The Life and Diary of Mohammad Hasan Khan E'temad os-Saltaneh," *Middle Eastern Studies* 37-1 (2001), 101-141.
- (2) 19世紀前半、マーフィー家の人々は、カズヴィーン知事の圧迫を逃れてアゼルバイジャン Ādherbāyjān のアッバース・ミールザー 'Abbās Mīrzā の配下に入った。また、以下の事実より、ホセイン・コリーの活躍期にも、同家の本拠地はカズヴィーンだったと推測できる。ホセイン・コリーの耳の不自由な従兄弟 (『*Tadhkirat al-Abā*』の著者) が生涯の大半をカズヴィーンで過ごしたこと、ホセイン・コリーの妻がカズヴィーンの人であること [Māfi 1362: 12, 13, 15], 初めて任官したホセイン・コリーが、カズヴィーンからテヘランに来たこと [Māfi: 31], 1290/1873年の時点で、ホセイン・コリーたちの家がここにあったこと [Māfi: 63]。19世紀後半の新聞に掲載されたホセイン・コリーの経歴でも、彼はカズヴィーン出身とされている。Sharaf, no. 72, 1307Kh.
- (3) ホセイン・コリーの父及びその兄弟はアッバース・ミールザーのもとで活躍し [Māfi 1362: 12, 13], ホセイン・コリーの従兄弟でマーフィー族のリーダーでもあるケリージュ Qelīj は、19世紀半ば、すなわちナーセロッ・ディーン・シャー期の初めに、

トルクマンとの戦いで援軍を率いて、のちにホセイン・コリーが仕えることになるヘサーモッ・サルタネが統治していたホラサン Khorāsān に派遣された [MN: 1729; MB: 1115, 1117]。この時期、テヘランからホラサンに派遣された軍事集団に、マーフィーのゴラーム (gholām-e Māfi) [RŠ10: 403], マーフィー族 (ṭāyefeh-ye Māfi) [RŠ10: 483], マーフィーの騎兵 (savāreh-ye Māfi, savārān-e Māfi) [NT3: 353, 354] が認められる。またマーフィー家に属するかは不明だが、19世紀前半に Moḥammad Naẓār Khān-e Māfi なる人物がアッパース・ミールザーやホラサン知事のもとで主に軍事的活躍をし [RŠ9: 461, 539, 541; RŠ10: 45], Qanbar ‘Alī Khān-e Māfi という人物が、第三代シャー、モハンマド・シャー Moḥammad Shāh の使者として Qandahār の有力者に派遣された [RŠ10: 193, 234]。

- (4) その後マーフィー族の主導権がどこに移ったかは不明、Ma‘šūmeh Māfi も言及していない。
- (5) keshikkhāneh はシャーの護衛を担当する部署で、その成員を savār-e keshikkhāneh もしくは gholām-e keshikkhāneh, その長を keshikchibāshī という。彼らは、外出や旅行をするシャーの身辺と、そのオルドの警護にあたった。‘Abd Allāh Mostoufi, *Sharḥ-e Zendegānī-ye Man yā Tārikh-e Ejtema‘i va Edārī-ye Doureh-ye Qājāriyeh*, 3vols., Tehran, 1360Kh, vol. 1, 410.
- (6) 渋々衛兵所の仕事をする一方、ホセイン・コリーは文人たちとの交際を好んだが、その中に、彼の父祖と面識があり、かつ当時の宰相ヌーリー Āqā Khān-e Nūrī の息子の養育係 (laleh) でもある人物がいた。ホセイン・コリーは彼を通じて、宰相の息子の勉学の面倒を見る他の人々とも親しくなった。そのため、宰相及びその一族との親密さを中傷され、それを耳にした衛兵所長は気分を害した [Māfi: 31]。まさにこの頃、1275/1858年、ヌーリーが失脚したため [MN: 1809; MB: 1312; HA: 241], ますます衛兵所に居づらくなったのだろう。
- (7) 注(3)で述べたケリージュやマーフィー族の活躍以後、ホセイン・コリーがヘサーモッ・サルタネと主従関係を結ぶまでに、NDR Qolī Khān-e Māfi [RŠ10: 539], Naẓār ‘Alī Khān-e Māfi の息子 [NT4: 185; RŠ10: 680], 及び Naẓār Khān-e Māfi [RŠ10: 708] という人物がホラサンを治めるヘサーモッ・サルタネのもとで活躍した。このうち NDR Qolī は, Faṭḥ Allāh Khān-e Māfi の兄弟だと説明されている。彼はケリージュの父、すなわちホセイン・コリーの伯父で、マーフィー族のリーダーであり、甥に Nāder Qolī という人物がいた [Māfi 1362: 13]。NDR Qolī の活躍した時期はケリージュとはほぼ同じである。従って、NDR Qolī とは、Faṭḥ Allāh の兄弟ではないものの、ケリージュと同世代の、この Nāder Qolī かもしれない。
- (8) ホセイン・コリーは、アボル・ファトフ・ミールザーが父親の代理としてヤズドやエスファハンに赴任したとは書いていないが、他の史料により、代理だと考えられる。のちに、エスファハンから中央政府に納めるべき税の滞納分が、ヘサーモッ・サルタネに対して請求されたことから [Māfi: 88], 彼が正式の知事であったとわかる。

また、エスファハンはヤズドと引き替えに与えられたので [Māfi: 47, 48], ヤズドもヘサーモッ・サルタネから息子に託されたと解するのが自然である。

(9) ファールス地方の地元有力者、職人、商人たちが、ファールスのワジール *vazīr* に対する不満から、騒乱を起こし、ワジールの家の占拠や発砲が起こっていた [FN: 826]。地方統治における *vazīr* とは、財政業務を主要な任務とする行政長官。同じ役職を、その地方の知事、あるいはアボル・ファトフ・ミールザーのような実質的な知事の「代理」、すなわちピーシュカール *pīshkā*r と言うこともある。例えば注 (11) のバーケルハーニー *Bāqerkhānī* を、ホセイン・コリーはワジールと書いているが、ピーシュカールと記す史料もある。ER, 279.

(10) *Mīrzā Abū al-Ḥasan Khān Moshīr al-Molk*. 1226/1811-2 年生まれ。ファールス地方のワジールには、テヘランから赴任するタイプと地元有力者の二つのタイプがあったが、後者の場合、19世紀前半は、上記モシーロル・モルクの父 *Moḥammad ‘Alī Moshīr al-Molk*, 半ばから後半にかけては、このモシーロル・モルクだった [FN: 1069-1071]。彼はファールスのワジールとの折り合いが悪く、テヘランに滞在していた [Māfi: 41]。

(11) 当時エスファハンにいたバーケルハーニーは、ヘサーモッ・サルタネに息子を派遣し、ホセイン・コリーから、ホラサンの税務取り扱いの任命書 (*ḥokm*) を得たが、ホラサン赴任には気が進まなかった。しかし、ヤズドからエスファハンのピーシュカールに転任してきたナーゼモル・モルク *Moḥammad Ḥosein Nāẓem al-Molk* との軋轢で、ホラサンに追放され、ヘサーモッ・サルタネのもとへ行った [Māfi: 49]。間もなく他界したナーゼモル・モルクの後任がホセイン・コリーだから、バーケルハーニーは、ホラサンで不本意な地位に甘んじつつ、彼に対して嫉妬心を増幅させていたであろう。これが、本文IVで述べるホセイン・コリーが巻き込まれたエスファハンの税に関するトラブルの伏線になる。バーケルハーニーは、エスファハンの地元の財務官僚で、地理書では、“*Mīrzā Moḥammad Ḥosein Serāj al-Molk mostoufi-ye dīvān va vazīr-e sābeq-e Eṣfahān*”として「財務官僚及び書記 (*mostoufiyān va monshiyān*)」の範疇に入っている。*Mīrzā Ḥosein Khān Taḥvidār-e Eṣfahān, Joghrafiyā-ye Eṣfahān*, Tehran, 1342Kh, 126.

(12) とともにアラブ族が多く居住するペルシア湾岸にある。ダシュテスターンは、主要貿易港 *Būshehr* を含む一帯、ダシュティーは、ダシュテスターンの東南部に隣接する地方。19世紀半ばまで、この地域におけるファールス地方政庁の支配は脆弱で、地元有力者の統治下にあり、地方政庁は、たびたび平定のための軍事活動を企てた [FN: 746-7, 753, 780, 791, 800]。ダシュテスターンは19世紀半ばから地元有力者が統治権を失い始め、ヘサーモッ・サルタネがファールスに赴任した1275/1859年には、完全に喪失していた。一方、ダシュティーでも、1273/1856-7 年から統治権が地元有力者の手を離れ、中央政府の直轄になっていた [FN: 818]。ただし、後者の場合は、のちに地元有力者が統治権を回復することもあり、完全に没落したわけではない。すなわち、1275/1859

年頃は、この地域にファールス地方政庁の權威が及び始めた時期だった [FN: 1321, 1336]。拙稿「19世紀の Fārs 地方勢力 ボルーク統治権からみた諸勢力の動向」『上智アジア学』13 (1995), 68-9.

- (13) *Māfi*: 32. 仕事が順調だった理由として、現地の人々のヘサーモッ・サルタネへの恐怖心、及び、地元 khān たちがホセイ・コリーの父親と面識 (sābeqeh) があったことが挙げられているが、彼の父とこの地方との関係は不明。ダシュティーとダシュテスターンの統治に類似する事例として、1282/1865年からのファールス赴任期間中の、カーゼルーン Kāzerūn, ママッサニー Mamassanī, ガッレダール Galledār 統治 [*Māfi*: 328; *Yādgar*: 36] や、ホラサン滞在末期、1280/1863-4 年のサブザヴァール Sabzavār の騒乱鎮圧がある [*Māfi*: 38]。ただし、サブザヴァールの場合は、統治権を与えられたとは記されていない。
- (14) ナタンズの統治が、ホセイ・コリーに中央政府から直接任されたのではなく、下請けであったとする根拠は、1286/1869年、ファールス知事職を解任されてテヘランへ戻る途中のヘサーモッ・サルタネに、旧臣モハンマド・ホセイ (のちのナーゼモル・モルク) が、ナタンズで合流したことである [*Māfi*: 44]。つまり、この頃まで、ナタンズの統治は彼が下請けしており、その後、恐らく1287年、彼がアボル・ファトフ・ミールザーとヤズドに赴任した時 [*Māfi*: 45]、ホセイ・コリーが替わったと推測される。時期は不明だが、ナタンズの統治権がヘサーモッ・サルタネにあったことは確認できる。Moḥammad Ḥasan Khān E'temād al-Saltaneh, *Chehl Sāl Tārīkh-e Īrān*, vol. 1, ed. I. Afshār, Tehran, 1363Kh, 429. ただし、ナタンズとホセイ・コリーとの関係は、これに留まらない。まず、ヘサーモッ・サルタネのもとを去ってから数ヶ月、彼は中央政府の文書を扱っていたが、手当 (mavājeḥ) はナタンズの税から支出されていた [*Māfi*: 66]。そして1309/1891年までに、ナタンズ付近に私有地を得ていたとみられ、この年、ここを通過した時、自費で貯水槽 (ābanbār) の修繕とカナートの掘削をさせた [*Māfi*: 174-5]。
- (15) 知事を長とする地方政庁は、中央政府財務省作成の予算書に基づき、税を徴収・支出した。支出には、当該地方での支出のみならず、中央政府の支出の支払い割り当て分が含まれ、地方税務と中央政府の活動が連結していた。知事は、年度末に領収書など証拠書類を添えて会計報告書を財務省に提出して会計検査を受け、予算書と異なると差額を請求されることがあった。Willem Floor, *A Fiscal History of Iran in the Safavid and Qajar Periods 1500-1925*, New York, 1998, 282-4.
- (16) ヤズド、ホラサン、エスファハンのワキール職 (vekālat) のうち、ホセイ・コリーは、ヤズドとホラサンについては、vekālat と書いているが、エスファハンに関しては、地位の名称を挙げていない。しかし、職務内容からすれば、テヘラン駐在ワキールである。
- (17) 文書作成に同席したのは、Mollā 'Alī Kanī という当時の有力ウラマー。彼については、Bāmdād 1363, vol. 2, 349-352. [vazīr の 'Īsā] とは Mirzā 'Īsā-ye Tafreshī で、

19世紀後半に主に財務大臣として活躍したモストウフィーヨル・ママーレク Mirzā Yūsuf Mostoufi al-Mamālek の姉妹の夫。1283/1867年、シャーがホラサンへ赴く際、シャーの実質的代理としてテヘランに残ったモストウフィーヨル・ママーレクにより、幼少のテヘラン知事のワジール職につけられ、以後“vazīr”が通称になった。Bāmdād 1363, vol. 2, 514-5. モヘップ・アリーの相続人の土地は、王室財務を司る高官モアイエロル・ママーレク Dūst ‘Alī Khān Mo‘ayyer al-Mamālek も購入を希望していた [Māfi: 63]。彼はモストウフィーヨル・ママーレクと対立しており [Māfi: 44], 1288/1871年には、短期間、モストウフィーヨル・ママーレクに替わり財務大臣になった [MN: 1923, 1926]。従って、ヘサーモッ・サルタネがモストウフィーヨル・ママーレクと親しいイーサーを代理にたてたのも、同じ土地をねらうモアイエロル・ママーレクに対抗するためかも知れない。モアイエロル・ママーレクについては Bāmdād 1363, vol. 1, 495-500。

(18) この箇所以降、ホセイーン・コリーは「モヘップ・アリーの相続人」ではなく「モヘップ・アリー」と書いているが、彼は1272/1856年に他界しているから [RS 10: 628]、誤りである。彼は1830年代、1840年代に軍事的活躍をした人物で [RS 10: 60, 68, 239, 240, 312, 315-317, 359]、妻は第二代シャー、ファトフ・アリー・シャーの娘である [MN: 1627; Māfi: 63]。

(19) セイフォッ・ドウレの父は、ファトフ・アリー・シャーの王子アリー・ミールザー・ゼッロ・ソルターン ‘Alī Mirzā Zell al-Solṭān。彼は、1250/1834年のファトフ・アリー・シャー没後、モハンマド・シャーのテヘラン到着まで、Shāh と名乗って捕らえられ、オスマン朝に逃亡した [Bāmdād 1363: vol. 2, 381-384]。そのため、セイフォッ・ドウレもオスマン朝に逃れていたが、1273/1856-7年には帰国した。その後の彼の経歴については、1278/1861-2年のトルシーズ Torshiz, 1296/1878-9年のアルダビール Ardabil などの知事職獲得程度しか知られていないが [Bāmdād 1363: vol. 2, 133-134], Māfi より、少なくとも1287/1870-1年から1295/1878年までは、ヘサーモッ・サルタネの配下にいたことがわかる [Māfi: 47, 96]。すなわち、1287年、ホラサン知事職を得たヘサーモッ・サルタネによって、現地へ先発させられ、1294年から翌年にかけて、彼の税務会計に携わっていた。

(20) モシーロッ・ドウレは、刑罰の宣告・執行の権利の一部を地方から奪うといった地方知事の権限縮小や、圧制を行う地方知事の処罰を表明したが、ヘサーモッ・サルタネは無視した。ヘサーモッ・サルタネ解任後、モシーロッ・ドウレはシャーとヨーロッパ旅行に出発したが、ヘサーモッ・サルタネらの激しい反感によって、帰国後、テヘランに戻れず、一時、中央政界から離れた。Guitiy Nashat, *The Origins of Modern Reform in Iran, 1870-80*, Urbana, 1982, 83-94。

(21) 代表的な例に、ナーセロッ・ディーン・シャー期の初代宰相 Amīr-e Kabīr がいる。彼の略歴については“Amīr (-e) Kabīr,” *Encyclopaedia Iranica* (London, Boston and Henley, 1985-) を参照のこと。

文献略号

史料

A 'A: Mirzā Moḥammad Naṣīr al-Ḥosein Forṣat-e Shirāzī, *Āthār-e 'Ajam*. repr., Bombay, 1354 A. H.

ER: Hāj Mirzā Ḥasan Khān Sheykh Jāberī-ye Anṣārī, *Tāriḫ-e Eṣfahān va Rey va Hame-ye Jahān*. Tehrān, 1321Kh./1943.

FN: Hāj Mirzā Ḥasan Ḥoseinī-ye Fasā'ī, *Fārsnāmeḥ-ye Nāṣerī*. ed. M. R. Fasā'ī, Tehrān, 1367Kh.

HA: Moḥammad Ja'far-e Khormūji, *Ḥaqāyeq al-Akḥbār-e Nāṣerī*. ed. H. Khadivjam, Tehrān, 1363Kh.

Māfi: Ḥosein Qoli Khān Neẓām al-Salṭaneḥ-ye Māfi, *Khāterāt va Asnād-e Ḥosein Qoli Khān Neẓām al-Salṭaneḥ-ye Māfi*. ed. M. Etteḥādiyeh et al., 2nd. ed., Tehrān, 1362 Kh.

MB: Moḥammad Ḥasan Khān E'temād al-Salṭaneḥ, *Merat al-Boldān*. ed. 'A. Navā'ī, Tehrān, 1366-8Kh.

MN: Moḥammad Ḥasan Khān E'temād al-Salṭaneḥ, *Tāriḫ-e Montaẓam-e Nāṣerī*. ed. M. E. Raḡvānī, Tehrān, 1363-7Kh.

MSh: Moḥammad Ḥasan Khān E'temād al-Salṭaneḥ, *Maṭla' al-Shams*. 3vols, Tehran, 1976.

NT: Mirzā Moḥammad Taqī Lesān al-Molk Sepehr, *Nāsekh al-Tavāriḫ Salāṭīn-e Qājāriye*. 4vols, ed. M. B. Behbūdī, Tehrān, 1353Kh.

RŠ: Reḡā Qoli Khān Hedāyat, *Tāriḫ-e Rouḡat al-Ṣafā-ye Nāṣerī*. vol. 9, 10. Tehrān, 1339Kh.

VE: Sa'idī Sirjānī (ed.), *Vaqāye'-e Ettefāqīyeh*. Tehrān, 1362Kh.

Yādgār: 'Abbās Eqbāl (ed.), "Ḥosein Qoli Khān Neẓām al-Salṭaneḥ-ye Māfi." *Yādgār* 3-2 (1325Kh.), 31-51.

参考文献

Bāmdād, M. 1363: *Sharḥ-e Ḥal-e Rejāl-e Īrān*. 3rd ed., 6vols., Tehrān, 1363Kh.

Māfi, M. 1362: *Moqaddameh*. (Māfi の前書き)